

戸が開いてゐるので、頼さんのところへ寄る。

店員が二人椅子に掛けてゐる。板の間に這ひ上つて、僕は布團も着物も脱ぎ棄てゝ了つた。

熱が出たのだ。

體が焼けるように熱い。

喉が乾くから水を持つて來い、と僕は店員に言ひ付ける。

頭に血が無くなつて卒倒しそうになる。

頼さんも復ちやんも顔を見せない。

僕は白い襦袢と、コシマキ一枚になつて、ブルブル顫えてゐた。

坐禪の時のように、兩足を組んで合掌したり、兩手で虚空を掴んだり、或は印を結ぶ真似をしたり、色々しなければ、凝乎首を支えてゐる力が、僕の體にはなかつたのだ。

「俺の弟も死ぬ時は、此んなに苦しんだのだ。

オンサラリキヤ、ソワカ」

満身の水分が、僕の兩眼から、蒸發してゐたかも知らない。